

(28)

氏名(生年月日)	三宅裕子
本籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第737号
学位授与の日付	昭和60年10月18日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	卵巣腫瘍のCT —組織診断との対比—
論文審査委員	(主査) 教授 重田 帝子 (副査) 教授 武田 佳彦, 教授 渡辺 宏助

論文内容の要旨

目的

女性骨盤内腫瘍の診断には超音波断層法が最優先されるが、超音波断層法で診断が困難な場合や悪性腫瘍を疑う場合にはコンピューター断層法(CT)が役立つことが多い。本研究は各卵巣腫瘍のCT像の特徴を明確にし、これと組織診断との対比によってCTの組織診断に対する有用性について検討を行なった。

対象および方法

1977年5月から1983年12月までに本学において骨盤腔のCT検査を施行し、手術および剖検で病理組織診断の確定できた卵巣腫瘍87症例109病変を対象とした。

CT像では発生側、形態、大きさ、内部構造について検討し、腫瘍の内部構造は便宜上嚢胞性、充実性、混合性の3種に分類した。ここで用いた嚢胞性とは嚢胞成分が腫瘍の2/3以上を占めるもの、充実性とは充実成分が2/3以上を占めるものとし、それ以外のものは混合性とした。

CT像の検討上、良性群はムチン性嚢胞腺腫、子宮内膜症性嚢胞、類皮嚢胞腫、その他に、悪性群は原発性卵巣癌と転移癌に分類した。

結果

1) 発生側については良性群では全体的に両側発生は8.6%と少なく、これに対し悪性群は原発性卵巣癌の25%、転移癌の77.8%と両側発生が多く、特に病理学的には転移癌の全例が両側発生であった。

2) 良性群のムチン性嚢胞腺腫は大きな多房性嚢胞性腫瘍で、隔壁の带状肥厚、各小嚢胞のCT値が異なること、子宮内膜症性嚢胞では壁の肥厚した単もしくは

は二房性嚢胞性腫瘍を呈し、類皮嚢胞腫では脂肪を含む点など、CT像の内部構造はそれぞれ特徴的な所見を示した。

3) 悪性群の原発性卵巣癌は73.3%が嚢胞性腫瘍を呈し、内部構造では壁、隔壁の肥厚、充実成分を伴うものが多かった。一方転移癌では混合性および充実性腫瘍を呈したものが87.5%と多く、このうち混合性腫瘍では嚢胞成分と充実成分の境界が原発性卵巣癌に比べて不明瞭であった。

考察

卵巣腫瘍は内部構造と発生側の観察がCT像による良・悪性の判定上、重要と思われた。

良性群ではムチン性嚢胞腺腫、子宮内膜症性嚢胞、類皮嚢胞腫はそれぞれ特徴的CT像から鑑別可能であった。

悪性群の原発性卵巣癌と転移癌のCT像による相異に関する報告は殆どなされていないが、今回の検討から転移癌では両側充実性もしくは混合性腫瘍であること、混合性腫瘍では充実成分と嚢胞成分の境界が不明瞭であることの2点が原発性卵巣癌との鑑別上重要な所見と考えられた。

結論

卵巣腫瘍87症例109病変のCT像と組織診断との対比により、①卵巣腫瘍の良・悪性の鑑別、②良性群の各疾患の特徴的CT像の把握、③悪性群の原発性卵巣癌と転移癌との鑑別など臨床上極めて重要な所見が得られ、卵巣腫瘍のCT像は腫瘍の存在診断のみならず組織診断に対する有用性の高いことが確認できた。

論 文 審 査 の 要 旨

本論文は、女性骨盤内腫瘍の診断のなかで、特に各種卵巢腫瘍のCT所見の特徴を明らかにし、これと病理組織診断との対比によって、CT法の臨床上的有用性を明確にしたもので、学術上価値ある論文と認める。

主論文公表誌

卵巢腫瘍のCT

—組織診断との対比—

東京女子医科大学雑誌 第55巻 第4号
372～386頁（昭和60年4月25日発行）

副論文公表誌

- 1) 副腎のRI診断
臨床医 6 (1) 103～107 (1980)
- 2) 子宮内膜症の超音波断層像
断層撮影法研究会雑誌 10 (1) 28～32 (1982)
- 3) Retrofascial space 病変のCT
臨床放射線 27 (12) 1339～1345 (1982)
- 4) 肝臓—肝限局性病変の超音波検査およびCT—
治療 65 (11) 2189～2198 (1983)
- 5) 遺残ガーゼによる膿瘍のCT像
臨床放射線 29 (3) 377～380 (1984)
- 6) 転移性卵巢癌のCT像
臨床放射線 30 (1) 55～59 (1985)
- 7) 甲状腺癌におけるCTの意義—隣接臓器への浸潤について—
日放会誌 45 (4) 600～605 (1985)